

提案から実践へ、次期学習指導要領を見据えた探究学習 ～3学年のESD学習における「真正の学び」～

令和7年度山ノ内中学校3学年（代表者：島田俊哉）

地域活性化の方策を討論会で町に提案して終わる従来の学習を見直し、生徒が地域の当事者として行動し「外部の“ヒト”」と協働する「**実践・協働型**」へと転換。「**当事者性の向上・PDCAの実質化・属人化の緩和**」を実現。これらのカリキュラム・マネジメントを次期CSで重視される「**真正の学び・実現可能性**」を軸とした構造に位置づけた。 ※ESD：Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)
キーワード：カリキュラム・マネジメント、ESD、探究学習、次期学習指導要領

1. 研究の背景

【本校の課題】

- ・学習のゴールが「提案」で終わってしまっていたことで**当事者意識に欠けた**ままの学習になっていた
- ・様々な立場の大人が参加し、良質なフィードバックが得られる討論会という場にもかかわらず、提案の質が低い（**PDCA(探究サイクル)の機能不全**）
- ・**教員の異動等に伴う属人化**による、コンテンツへの依存や**カリキュラム・マネジメントの形骸化**

【新CSの方向性】

- ・全ての子どもに、社会の創り手としての資質・能力を育成する有意味で深い学び（**真正の学び**）[石井(2025)]
→学校外や将来の社会に接続された課題に向き合い、学問の本質や社会的実践と接続する「生きて働く」学び
- ・授業時数や指導内容を含めた教育課程の在り方は、子供たちに求められる資質・能力や学習状況などを総合的に考慮した上で（中略）**過度な負担・負担感が生じにくい在り方**を追求する[文部科学省(2025)]
→**実現可能性の確保**

3. 学習の実際

「わたりんご」開発	地域イベント創造	地域合同文化祭	山中アロマ	写真スポット設置・発信
<p>飲食店の方のアドバイス</p> <p>討論会資料</p> <p>販売風景と完成品</p>	<p>祭り担当者の打合</p> <p>祭り当日の様子</p>	<p>生徒作成のチラシ2種</p> <p>地域合同文化祭開催に向けて</p> <p>後輩への報告会資料</p>	<p>町担当者による説明</p> <p>討論会での発表</p>	<p>顔はめパネルの試作</p> <p>パンフレットの試作</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・探究のゴールを提案ではなく「実践過程における検証と改善」に置き直したことで、生徒は課題を自分事とし、地域との関係も一方向的な評価から協働的な支援へと転換 ・討論会はゴールではなく通過点となった 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人の指摘を取り入れて再提案し、実現 ・地域からの制約や意見は単なる否定ではなく、探究を前進させる評価として、生徒の改善行動を促した ・安易な地域課題解決ではなく、子どもの興味関心に依拠する重要性 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール達成を第一としない 	<ul style="list-style-type: none"> ・願いをもった後、今後の活動をどう進めるかで多くの時間を要し、DoやCheckまでは十分に行えなかった ・探究学習において、知的理解が深まることと、主体的な実践が進むことは必ずしも直線的に結びつくわけではない 	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の実践(Do)は行われたものの、活動の意義や地域との関係性を生徒が十分に実感するには至らず、やや消極的な生徒が多かった ・成果物の作成自体が探究学習の成立を保証するものではなく、活動に向かう動機や当事者意識が重要

後輩への活動報告会

- ・来年度2～3学年が協同してプロジェクトを進めていくことに（教師の負担も軽減）
- ・生徒自身による探究過程の再構成、他学年への学習の可視化、次年度のテーマ設定や学習の方向性を調整するための**フィードバック機能**を果たした



・改めて自分たちで計画を考えて町の未来のために行動、実現するのはとても大変で難しいことなのに、素晴らしいなと思いました。**私たちが3年生みたいに町の活性化を目指していきたい。**（1年生）
・調べて発信するだけだとネットにだいたい書いてあるからつまらなかったし、やる気もあまりなかったけれど**自分たちで調べて写真で撮ったものの改善点を考えたり人に発表したりすることでやる気も出たし、いろいろな意見が出てたのしかった。**（3年生・写真スポット設置班）

4. 成果と課題

- 成果**：「真正の学び」の実現・属人化を打破する学習文化の循環
- ・本単元の「真正の学び」は、**外在的な社会貢献の達成ではなく、実社会の制約の中で判断を更新し続ける経験**
 - ・教師は「教える→共に探究する（教師も地域活性化の領域は専門外・教師の助言の採否を生徒が選択する関係性）」存在へ
 - ・**オーナーシップはできるだけ生徒に、そこに教師が伴走するという構図が持続可能なカリキュラムマネジメントへの鍵**
- 課題**：振り返りの在り方、教科学習の知識をESDでどう活用したのかを生徒が自覚できる手立ての充実
（参考文献）石井英真「次期学習指導要領に向けた内容の重点化・構造化のあり方」、文部科学省「論点整理」